

## 第 20 回教育課程編成委員会 議事録

開催日時：令和 5 年 3 月 22 日（水）13：00～14：00

場所：下関福祉専門学校 2 階

出席者 花貫 一博（社会福祉法人 下関社会福祉協議会 在宅福祉課長）

河田 勝志（一般社団法人 山口県介護福祉士会 理事）

関谷 豊（下関福祉専門学校 校長）

田中 満由美（下関福祉専門学校 教務部長）

藤岡 恵子（下関福祉専門学校 教務主任）

長本 幸子（下関福祉専門学校 専任教員）

木村 薫（下関福祉専門学校 事務局） \* 敬称略

議事 1 今年度の教育目標評価及び課題

議事 2 今年度の「福祉と文化」について

議事 3 各委員からの意見要望

議事 4 その他

### § 1 今年度の教育目標評価及び課題

今年度の教育目標に対しての評価及び課題を、担任より報告する。

【1】福祉専門職の役割を理解し、職業倫理に基づいた介護ができる。

1 学年評価：福祉職の役割は理解しているが、1 年次は見学実習 6 日間、施設実習 10 日間と実習での実体験が乏しく実感が伴わず理解できない学生がいる。

2 学年評価：施設実習を 18 日間と 27 日間経験をし、その実習で介護過程の展開をしていくうえで、概ねの学生は、自立支援は自己決定のもとで行うことを学ぶことができた。しかし自分の考え方に固執したため自己決定を待たず、介助者の押しつけとなる学生もいた。

【2】多職種の業務を知り、チームの一員であることを理解し、チームケアに参画する能力を養うことができる。

1 学年評価：多職種の役割は、講義で理解できているが、実習で多職種の役割を生かすことができず、指示待ちの状態が多かった。

2 学年評価：実習での学びの中で、それぞれの施設での特色のあるチームマネジメントを理解でき、一人でなくチームケアの大切さを体験することができた。

【3】介護の基礎的知識や技術を習得し、利用者のニーズに応じたケアの実践ができる。

1 学年評価：コロナ禍の中、状況により実技を座学に変更し対応したため、基礎的技術の習得に時間を要したが、習得はできたと思われる。

2 学年評価：残存能力の中から潜在能力を引き出すことがあらたな利用者の自信につながると期待したが、残存能力を見つけるだけで精一杯の学生が多かった。

#### 委員からの質疑及び意見

委員：一年生では分からなかった事が二年生では出来るようになり、理解が深まったのであろうことが分かる。感想としては、順調に学習が進んでいる、という印象を持った。

(A) 現在の二年生が一年生であった時は、コロナ禍もあり、ほとんどの実技に関し、うまくいかなかった。実際に施設実習に入り、その中で利用者様、そして職員の方々と接することによって、学校ですべき学習のかなりの部分を施設でさせていただいた、という部分もある。

委員：受け入れる側として、「こういう目標を持って実習に臨んでいる」ということを施設にも周知していただけると良い。また、座学は実際に働く中でとても大切だと感じている、学生にはしっかりと学んで欲しい。

(A) 残存能力はすぐには分からないが、何回か接する内に分かるものではある。学生には、その中に隠れている潜在能力を実習の中で見つけることによって、利用

者様に自信を与え、生活意欲を向上させることが出来るようになる事を期待したが、実際にはそれを見つけるだけで精一杯であった。今後、そういった面を総合演習の講義の中でより深く学習していくべきであると考えている。

委員：介護過程に関して、施設側から「この人はこういう人だ」ということを、根拠をもって学生へ十分に伝えることが出来ていなかったかもしれない。また学生間での「シミュレーション」については、実際の介護の現場に限らず今後社会に出た時にも役立つものなので、とても良いと思う。

委員：個別支援計画において、「〇〇したい」「〇〇ができるようになる」というような書き方の中で、「それでこの介護をしているのだ」「こういう目標があるのだ」という理解が順序だててできるようになれば良い。

(A) 介護過程の講義の中で学んではいるが、二年間では理解することが難しいのが現状。介護の現場での課題は、本人の思いを全面的に出すことが大切。利用者様の自己決定をどう反映させるか、学生に理解させることが重要である。

委員：施設で実際に指導にあたる現場の担当が、学生の目標や学校のカリキュラム等を把握していれば、実習指導もしやすいのかもしれない。施設と学校との連携が大切。

(A) 実習に入る前に、学校から施設側に「学生には実習に関するこういう目標がある」ということをきちんとお伝えする必要がある。

委員：来年度に向けて、学生はよく勉強している、こちらが勉強させられる。目標の共有に関しては、受け入れ先と学生とでぜひやるべきである。

委員：目標の中では、コミュニケーションの部分が一番大事だと思う。コミュニケーションは身につけるのは難しいが、上手な人は職員間や利用者様と関わる際にとっても役に立つ。

## § 2 今年度の「福祉と文化」特別授業について

留学生には「着付け」が人気であった。また「職業倫理」の講義では、寸劇を通して、実際にやってみることで色々な視点が経験でき良かったとの声が多数あがった。

「卒業生との交流」の中で、卒業生から「知識は学校でないと身につかないから大切」との声もあった。

委員：体験が中心のカリキュラムでとても良い。また、「卒業生との交流」もとても良いと思う。

委員：現場の声として利用者様の家族からの声をきける機会があると良いと思う。介護の現場では、コロナ禍もあり、歌を歌う機会は減ってきている。ゲームやリハビリ体操も以前よりは減っているのが現状。

### § 3 各委員からの意見要望

委員：来年度から入学生が減少しているということで、だんだんこういうことになっていくのか、という印象。いかに介護福祉の魅力を伝えていくかが大切。

委員：介護は勉強しなくても出来る。だが、基本の知識を専門学校で学んでいることがとても大切である。実際は後から知識を得ることは難しいので、しっかりと学生には学んで欲しい。

委員：就職サイトからの求職者（無資格）の離職率は高いが、専門学校出身者の離職率は低い。

次回の委員会開催の日程について

令和5年8月開催予定